

記者の目

カンボジア問題



藤原 健
(特別報道部)

国連主導の平和プロセス

が浮かぶ。キャンプの地面に指で数式を何度も書いて算数を勉強していた十歳の少女。砲撃で一人息子を失った若い母親。父親が片足を地雷で吹き飛ばされ「かたきをとる」と硬い表情を崩さなかった七歳の子供。キャンプで生まれ病魔と闘っていた幼い命。

この六年間、カンボジア国内、タイの難民キャンプ、日本に定住した難民など五百人近いカンボジア人の話を聞いてきた。その中には、パリで会ったシヤヌーク殿下やフアンペン政府のフ

戦争にカンボジア人自身の政争が絡んでいなかったとはいわないが、これほど長く、激しい戦争状態をもち続けたものは大國の思惑だ。たまたかに異存を挟む人は少ないだろう。

カンボジアは第二次世界大戦終了直後から、隣国ベトナムとともに東西冷戦の最前線に立たされた。シヤヌーク政権は米國・中国・旧ソ連などのバランスの上で政権維持を図ったが、一九七〇年には米國の後押しでロシヤ・ソ連政権が誕生した。しかし、同政権は五年後、中国の支

帰還難民への責任果たせ

援を受けたボル・ポト派によって倒された。そのボル・ポト政権も四年後、ベトナムの支援を受けたヘン・サムレン政権がフアンペンを追いやる。この政変劇も首謀者は中国とベトナム・旧ソ連の対立だったことによく知られている。その後、米國、ベトナム、中国などの援助で泥沼の内戦に入ってしまった。

人口一千万人足らずの國に何と多くの大國が介入し、何と多くの武器が持ち込まれたと云うだろう。その度におびたらしい血を流したのはカンボジア人だけだった。

「なぜ逃げてきたかかって？ あんなにゴタゴタが続けばだれだって食えなくなる」。難民キャンプで聞いたいらいらした返事に言葉が失ったこともあった。三年前の冬、タイのキャンプから祖国に帰りはじめた難民を取材するため、高田警視が殺されたアンピル近郊の村に入ったことがある。しかし、村に入っただけで、タイ側は砲撃を受け、すぐにタイ側に脱出した。国境を越えホツとすると同時に、砲弾から逃れられないカンボジアの民衆を思っって胸を痛めた。

欠ける「民衆」の視点

ン・セン首相らもいるが、大部分は庶民だ。自衛隊が駐留しているタケオとタイのキャンプで、小学五年生に「将来の夢」をアンケートしたことがある。男子は「兵隊」、女子は「看護婦」という答えが圧倒的に多かった。

先行しすぎる大國の思惑

各地で軍事衝突が始まっているという記事を目にするたびに、何人ものカンボジア人の顔

た。戦争の中でしか自分の未来像を描けない子供たちを見、硝煙が子供たちの気持ちをしぼるほどおどろかしているのか、あんなにたんなる思いに駆られた。



この子らの「今」が気にかかる—1987年5月、タイ側のカンボジア難民キャンプで、松沢志郎(写真部) 写す

平和な國からやってきた私には多分彼らの絶望感理解できないのだらう。多くのカンボジア人は戦火を逃れて身を護め、やがて故國を捨てた。カンボジア問題はカンボジア人の自立百活の問題、国連はその手助けなどだが、いえるだろうか。歴史の経緯を考えると、大國のしよく罪意識こそ、カンボジア問題「を考える出発点なければならぬはずだ。

パリ協定が結ばれ、UNTACの下で選挙を行い、カンボジア人による合法的政権をつくる。計画通りに事が進めばだれも異存はないだろう。しかし、その和平プログラムそのものが戦争の材料にされている。UNTAC要員の死傷は報道さ

れるが、カンボジア人の被害は伝わってこない。今年に入りキャンプに残っていた知り合いの難民も次々に祖国に帰った。砲弾の飛び交う風景に彼らを重ねることはつら。国連要員よりはるかに多くのカンボジア人の血が流れていることは想像に難くないからだ。それでも国連は選挙を強行しようとしている。

「選挙を延期して問題解決の道があるのか」といふ主張に私も言葉はない。しかし、カンボジア問題を論じながら、カンボジア人の影が何と薄いつてか。国連難民高等弁務官事務所(UNHCR)はタイのキャンプから三十七万人の難民を祖国に送り返した。UNHCRは、国連開発計画(UNDP)などと協力して、帰還難民に食糧、教育、医療などの援助をしはらく続けていることになっている。しかし、前提となる平和は崩れてしまっている。